

## 『宇津保物語』 仁寿殿女御考

—その殿舎をめぐるつて—

栗本賀世子

### 一、はじめに

現存する平安朝物語の中で最古の長編物語、『宇津保物語』には仁寿殿女御という女性が登場する。仁寿殿女御は、源正頼と嵯峨院皇女の大宮との間に生まれた長女で、朱雀帝に入内し、寵愛を受けて多くの御子をあげた。立后し国母となることこそできなかったものの、朱雀帝後宮において第一の寵妃であることは間違いない、后宮をして「仁寿殿の盗人」（国譲下・七五一頁）と罵倒させたほどであった。女御の妹のあて宮は、新帝の寵愛深く東宮の母となり、一方で女御の生んだ女一宮は、朱雀・新帝両帝の信頼あつい主人公仲忠の妻となった。何かとあて宮・女一宮の世話を焼き相談に乗る彼女は、よき姉・よき母であった。こうした

意味で、仁寿殿女御は、源正頼一族の繁栄の一端を担う、物語中のまさに重要人物であったと言えよう。

しかし、この女御の殿舎が仁寿殿であることには疑問が残るのである。仁寿殿は平安朝においてキサキ<sup>①</sup>の居所として使われた形跡がないとの指摘が既になされている。ただし、先学は「物語的設定」との一言で片付けてしまうことが多い、彼女の居所が仁寿殿であることの意味までは深く踏み込んで考えていないように思える。仁寿殿を居所としたことは、作者が無作為に殿舎を選び出した結果でしかないであろうか。我々は、その設定の背後にある物語作者の意図・工夫の可能性まで吟味する必要があるのではないか。本稿では、本当に虚構であるかをもう一度確認した上で、もしそうならば、作者に何らかの設定意図があったか、

そしてその設定が物語の展開に影響を及ぼしたかどうかについて考察していきたい。まずは史実における仁寿殿の姿を見ていくことにする。

## 二、史実における仁寿殿

仁寿殿は紫宸殿の北、清涼殿の東にあり、内裏のまさに中心に位置する殿舎である。桓武・平城天皇の在所となっていたとの説もあり、建物自体は古くからあったのだろうけれども、「仁寿殿」という名を付けられたのは嵯峨朝の弘仁年間である。淳和朝の天長元年（八二四）には皇太子が後宮において謁見する際仁寿殿で酒肴がふるまわれたことが見える。<sup>(5)</sup>この頃の仁寿殿は天皇の常御殿であった。『日本紀略』天長元年（八二四）十二月一日条に「皇太子参<sup>ニ</sup>謁<sup>ス</sup>於中殿<sup>一</sup>。曲宴。」とあることから、淳和天皇の御座所は中殿（仁寿殿）にあったと推察されるのである。中殿とは、仁寿殿が紫宸殿と常寧殿の間に位置することから呼ばれた名である。<sup>(6)</sup>仁明朝になると、天皇は常御殿を清涼殿に移した。<sup>(7)</sup>しかし、仁寿殿では、第一皇子の元服や奏楽の催し、<sup>(8)</sup>内宴、御齋会内論義などの行事が行われている。

続く文徳天皇は、どういいうわけか<sup>(9)</sup>在位中一度も内裏の殿舎を用いず、東宮雅院、梨下院、冷然院を居所としていた。

しかし、その子の清和天皇は、即位当初は東宮を居所としたが、貞観七年（八六五）八月に内裏に入り、十一月には仁寿殿に移った（『三代実録』）。鈴木亘氏・瀧浪貞子氏によると、仁寿殿は、貞観元年（八五九）の三井寺の唐坊建立の際に解体移建されたが、清和天皇が内裏に入る前、貞観六年までには新造されていたという。<sup>(10)</sup>瀧浪氏は「文徳天皇以来一五か年の間、天皇不在となっていた内裏に、清和の外祖父、藤原良房が新造したものであろう」と述べている。仁寿殿に入った清和天皇は、讓位の前年弘徽殿・綾綺殿に移り、その後良房の染殿院に移ってここで讓位している。<sup>(11)</sup>しかし、それ以前十年もの間仁寿殿にいたのであり、ここが天皇の常御殿だったと考えられるのである。

清和天皇の次代の陽成天皇は、当初は仁寿殿を居所としたのだけれども、<sup>(12)</sup>その後は弘徽殿・清涼殿・常寧殿・綾綺殿などを転々としている。<sup>(13)</sup>このことは陽成朝の不安定な政情を現すとも考えられる。<sup>(14)</sup>しかしその中でも清涼殿に御することが多かった。仁寿殿は、即位当初こそ天皇はここにいたのだが、わずか一年で他の殿舎に移ってしまったため、以降は居所となることはなかった。陽成天皇の主たる居所は清涼殿であり、仁寿殿は一時的な住まいにすぎなかったのである。しかし、宮廷の恒例行事には利用されたようで、

相撲節・灌仏会・内宴・御齋会内論義に用いられている。<sup>(15)</sup>

光孝天皇は、在位中一貫して仁寿殿を用いた。それゆえか、この時期、曲宴や献物のことなどの華やかな宮廷行事がここで催されている。<sup>(16)</sup> また、仁和二年（八八六）正月二日には、藤原時平の元服の儀が仁寿殿で行われている（三代実録）。天皇が崩御したのも、仁寿殿においてであった。<sup>(17)</sup> ところが、その次の宇多天皇以降、天皇の常御殿を清涼殿とすることは定着する。<sup>(18)</sup> それからは仁寿殿が天皇の居所となることはなく、単なる行事を行う場と化してしまったのである。仁寿殿で内宴、観音供、相撲節が定期的に行われ、また時には御馬御覧、花宴、蹴鞠、大饗のことなどもあった。蹴鞠、相撲、御馬御覧は仁寿殿前の庭を利用して行われたのであろう。また、天皇の病氣回復を祈ったり早魃・地震などの天変地異を鎮めたりするために読経・修法が行われもした。そうした宮廷行事や仏事に用いられた記録は頻繁に見られるものの、しかし、誰かがこの仁寿殿を居所とした記録は見出せなくなるのである。

仁寿殿は、平安初期の天皇たちによって用いられていた。そこを常御殿とした顔ぶれを見ると、一時的に使用したと思われる陽成天皇を除けば、淳和・清和・光孝天皇がおり、二代の帝が連続して仁寿殿を利用していないことに気づか

される。これは、既に先学の指摘があるように、新帝になると旧宮を忌み居所を新しくするという伝統が日本にはあり、それに基づいて天皇ごとに常御殿を変える、すなわち、清涼殿と仁寿殿を常御殿として交互に用いるようになっていたからであると思われる。<sup>(19)</sup> 鈴木亘氏によると、神事が行われた平安宮中和院の正殿（神嘉殿）に仁寿殿は造りが類似しているという。<sup>(20)</sup> また、ここには観音像が安置されていて、観音供が行われていた。さらに、その位置は内裏のまさに中央にあった。これらを合わせて考えると、仁寿殿は、神聖なる殿舎として平安宮内裏の中心的な殿舎だったのでなからうか。だからこそ、平安宮の主たる天皇は、この殿舎を居所として定めたのである。しかし、宇多天皇以降、清涼殿が天皇の居所として固定されてからは、仁寿殿は、紫宸殿と共に専ら行事の行われる場として姿を変えるのである。<sup>(21)</sup>

こうして見てみると、仁寿殿は確かに、天皇の御座所となることはあったが、キサキがここを用いることはなかった。それどころか、天皇以外の誰かがここを居所とした記録もない。天皇しか用いることの許されない神聖な殿舎であったと考えられる。ただし、二つほどキサキが用いていたかもしれない事例がある。一つは、淳和朝で、後宮にお

いて皇太子が謁見した時のことである。

皇太子謁<sup>二</sup>見後宮<sup>一</sup>。便於<sup>二</sup>仁寿殿東櫺下<sup>一</sup>聊設<sup>二</sup>酒肴<sup>一</sup>。

〔日本紀略〕天長元年十月二十六日条

これについて、目崎徳衛氏は、淳和後宮の第一人者、皇后正子内親王が仁寿殿の主であったかもしれないとされる。<sup>(22)</sup>しかし、氏も認めているように、後宮の行事に使われてはいるが、それだけでキサキの居所であったとは断言できないだろう。淳和朝においては、仁寿殿はむしろ天皇の居所であったという見方が有力なのである。もう一つの例は、村上朝で、母后穩子が大饗に仁寿殿を用いた例である。

今夜於仁寿殿有太后大饗。

〔日本紀略〕天曆元年正月二日条

だが、これを以て穩子が仁寿殿を居所としたとするのは早計である。この前年、天慶九年（九四六）に朱雀帝が讓位した後、穩子は、新上皇と共に内裏を出て主殿寮に遷御した（『日本紀略』七月十日条）。その後は後院に落ち着き、九月には、上皇・穩子は朱雀院で遊覧の催しをしており（『貞信公記抄』九月十七日条、十二月には、院で仏名会を行っている（『日本紀略』十二月二十六日条）。穩子は、天曆元年（九四七）正月二日には仁寿殿で大饗を行っているものの、そのすぐ後には朱雀院で帝の拝謁を受けている（『日本紀略』正月四日

条）。前後の様子を見る限り、この頃の穩子の居所は朱雀院であつて、仁寿殿を用いたのは大饗のときだけ——ほんの一时的な使用であつたことが分かる。それを証拠づけるように、他に穩子が仁寿殿を用いた記録はないのである。角田文衛氏は「これ（引用者注：仁寿殿での大饗）はおそらく、朱雀院の修築が完全に竣工していなかったためであろう。その後は、穩子の主催する饗宴は朱雀院で行われるのが常となつた」と推定している。<sup>(23)</sup>

これらのことから、諸氏の指摘の通り、仁寿殿は、史上のキサキが用いたことのない殿舎であり、『宇津保物語』が一女御の居所としていることは、物語独自の設定であると確認できた。それでは次に、物語がどうしてそのような設定をしたかについて、考えてみることにする。

### 三、『宇津保物語』の仁寿殿

帝の居所となる以外は、宮廷行事・仏事の場としての意味合いが強かった仁寿殿は、丁寧に行事や催される有様を描く『宇津保物語』において、帝やキサキたちと臣下の交流の場としてその名を見せる。物語で、仁寿殿が最初に行事の場としてその名を見せるのは、祭の使卷である。

朝廷の詩作聞<sup>(24)</sup>こし召さすとて、博士・文人八十余人、

仁寿殿に参るべきを、朝廷の、にはかにとどまりぬ。

(祭の使・二二八―二二九頁)

これは、七月七日、七夕の日の出来事である。この日、朝廷では、仁寿殿で詩作のことが行われる予定であった。ただし、この時の詩作は何らかの事情で中止になったため、仁寿殿は名のみ登場するだけである。七夕の日に詩を作らせることは、平城・嵯峨・宇多・醍醐・一条朝などに見られ、御書所で行われることが多かった(平城・嵯峨の時は神泉苑で行われている)。仁寿殿で行われたことは記録には見えない。物語中では、帝の寵妃、正頼女の居所であることを意識して、特別に仁寿殿で催されたことにしたのでないだろうか。ちなみに、正頼女が仁寿殿にいたことは、既に祭の使巻以前の嵯峨の院巻で記されている。

かかるほどに、上達部、親王たちなど、みな仁寿殿に参り給ふ。殿上人、候ふ限り参れり。左大将〔源正頼〕、三条院に御菓物、御酒など取り寄せて、その御局に、多くの上達部・親王たちなどおはしまして、御酒参りなどして、御物語、上も春宮も。(内侍のかみ・三八〇頁)

こちらは、七月十日の立秋の日の宴のことである。仁寿殿にいる帝と正頼女のもとへ、次々と臣下が伺候して、そこで宴が始まったという形をとる。ここからは、帝の正頼

女への寵愛が読み取れ、あたかも、仁寿殿が後宮の中心的殿舎であるかのような印象を受ける。

また、ありし日の内宴を源正頼が回想していて、次のように言っている。

正頼、いまだ中将に侍りし時、かの御息所(承香殿御息所)、内宴の賄ひにあたり給ひて、仁寿殿に候ひ給ふ方に……  
(内侍のかみ・三八八頁)

これによれば、内宴が仁寿殿で行われたのだという。史実においても、内宴は仁寿殿で行われることが多かった。さらに仁寿殿が重要な役目を果たすのは、相撲の節会である。

その相撲の日、仁寿殿にてなむ聞こし召しける。内宴思ひ違へたるなるべし。(内侍のかみ・三九五頁)

相撲の節会は、主人公仲忠ら琴の一族の栄華を描くという、物語の主題の一つを達成するための重要な場である。この節会において、仲忠母は朱雀帝の前で稀有な琴の演奏を披露し、尚侍という名誉ある地位に任命される。仁寿殿はここでは、仲忠母のすばらしい琴の演奏によって、「累代の例」ともされるような相撲の節会の場として、重要な役割を果たすことになるのである。なお、実際に歴史上においても、仁寿殿は、紫宸殿と共に相撲の節会に用いられる

ことが多かった。

『宇津保物語』においては、史上の例に倣って内宴や相撲節会という仁寿殿を用いた行事がしばしば描かれているだけでなく、わざと七夕の詩作を仁寿殿で催すという虚構の設定まで為されている。意図的に、仁寿殿を宮廷行事の場として多く登場させようとしていることがうかがわれるのである。このことは、他の平安朝物語には仁寿殿の名が全く見られないことと比較してみるとよく分かるであろう。作者は、史上において華やかな行事の場であった仁寿殿の主として、朱雀帝のキサキ、源正頼女を設定し、その朱雀後宮における地位の高さを読者に知らしめようとしたのではなからうか。行事が物語中で描かれる度に、それらが催される仁寿殿の名を出すことで仁寿殿の格の高さを再確認させ、同時に、そこに住む仁寿殿女御の寵妃としての特別な立場を認識させようとしたと考えられるのである。仁寿殿は、弘徽殿と並んで帝の居所である清涼殿(24)に最も近い殿舎であり、ここを局として用いたということは、それだけ正頼大君に対し朱雀帝の寵があつたことを意味する。さらに、清涼殿への近さのみならず、史上において公の行事に用いられ、帝以外に居所とすることが許されなかったであろう格の高い殿舎を与えられたということも、彼女の

宮廷での待遇が破格であることを示しているのである。<sup>(25)</sup>

仁寿殿という殿舎の名が頻繁に登場し、そしてさらに仁寿殿女御が物語中で特に強い存在感を示すのは、相撲の節会が催される内侍のかみ巻である。次節では、この内侍のかみ巻で仁寿殿女御が果たす重要な役割について、具体的に検討してみることにする。

#### 四、後宮の主役、仁寿殿女御

##### 1、内侍のかみ巻と仁寿殿女御

内侍のかみ巻は、その巻全体にわたって仁寿殿を舞台としているといっても過言ではない。先にあげた物語中の仁寿殿で行われた行事のほとんどが内侍のかみ巻で描かれている場面なのである。まずこの巻の冒頭には次のようである。

かくて、七月ついたち頃、帝、仁寿殿の、大将の御息所(26)の御局に渡り給ひて……  
(内侍のかみ・三七七頁)

朱雀帝が仁寿殿の女御の局に渡るところである。寵妃、源正頼女の局が仁寿殿であることが前面に押し出されている。内侍のかみ巻以前の正頼女は、「仁寿殿」と呼ばれる場面もあるがわずか三箇所にとどまり、ほとんどの箇所では、「御息所」女御(27)としか語られない。それがこの巻になって、

読者に正頼女の局がどこかを思い出させるように、巻の初めから地の文で丁寧な語り直されている。これから、宮中仁寿殿とそこの主である仁寿殿女御が、物語の展開に大きく関与して行くことを予感させるような書きぶりである。

この後には立秋の日の宴や、相撲の節会が仁寿殿で行われる。中でも相撲の節会は、仲忠母を尚侍に任命し、琴の一族の栄華を描くために、物語において欠かすことのできない重要な場面であった。三上満氏は「仲忠母が参内し演奏の功により内侍督に任せられる栄光を描くことによつて、俊蔭巻に始まる琴の一族の物語にも一応の決着をつけているというわけである」と述べており、また高橋亨氏は「俊蔭の女が内侍のかみとなることは、『宇津保物語』の長編としての構成をなす中核にあたり、初秋の巻の相撲の節は、それを実現するための祭りの時空だったといつてもよい」と指摘している<sup>30)</sup>。

相撲の節会は、嵯峨院が吹上で行われた菊の宴に並ぶように、朱雀帝が例年よりも心をこめて準備させたものであった。内侍のかみ巻には、次のような帝の発言が見える。

こころの年ごろ、嵯峨の院の御時にも、国領りて後も、見所あることなかりつるに、さこそ言へ、ただ今の大将たち（左大将正頼、右大将兼雅）、少し、例の人にたち

まさりたる人にて、心遣ひせられけむ、〔今日の相撲の節は〕いと労あるかな。これに少しめづらかならむ筋にして、かの九日の等しき相撲になしてむ。「仁寿殿の相撲の節・吹上の九日」とも言はせてしかな

（内侍のかみ・四〇二頁）  
また、その後に源涼に琴を弾くよう所望するところでも、帝は次のように言う。

今日なむ、例の節会に似ず、物の興思ほゆる日になむあるを、今日、累代の例になりぬべかめり。思ふやう、「今少しめづらしからむことしつけて、同じくは、例にせむ。なほ、今日の相撲のこと、よにまたあるまじく、古事にせむ」となむ思ふ<sup>31)</sup>。「人のすまじきことをこそはせめ」と思ふに、涼の朝臣と、今一人となむある。朝臣の訪ひにもしたりし九日なむ、唐土にもなく、めづらしき例になりにし。今日の相撲をなむ、また、さなさまほしき。かの仕うまつりし琴仕うまつれ

（内侍のかみ・四〇二頁）  
そして、節会を人々の語り草になるような盛大なものにしたいという帝の希望は、主人公仲忠の母が参内して朱雀帝の前で演奏し人々を感動させることで、実現を見るわけである。この盛大な相撲の節会の舞台に仁寿殿が選び出さ

れたことは、自然とその主である仁寿殿女御に注目させることとなる。巻頭の帝の仁寿殿訪問、そこで繰り広げられた立秋の日の宴に続いて、あたかも、この相撲の節会も、帝が寵妃を楽しませようとして仁寿殿で催した行事であるかのような印象を読者に与えるのである。さらに、作者は、仁寿殿女御の後宮の中心的人物というイメージを確固たるものとすべく、女御自身をこの節会で活躍させる。仲忠女が尚侍になるという琴の一族の栄光を描くことが、内侍のかみ巻が書かれた目的であったろうが、それを実現させるために、この巻には巧妙な仕掛けがなされており、そこに仁寿殿女御が深く関わってくるのである。

## 2、華麗なる「賄ひの女御」

かつて俊蔭巻で仲忠祖父である俊蔭は娘（後の仲忠母）にこのように語った。

娘は、天道に任せ奉る。天の掟あらば、国母・女御ともなれ。掟なくは、山賤・民の子ともなれ。我、乏しく貧しき身なり。いかでか、高き交じらひはせさせむ

（俊蔭・二二頁）

この予言を成就させるために作者は、あの手この手を使って、物語を仲忠母の尚侍任命への方向へと推し進めていく。

尚侍は後宮女官の職であり、「国母・女御」とまではいかないけれども、キサキな一面を持つていたのである。そのキサキな役職に仲忠母をつけるために、帝の仲忠母への愛情が語られるのは必須であった。作者は、朱雀帝がかねてより興味を持つていた仲忠母に見事な琴の演奏を行わせて、帝の彼女への想いを募らせるように仕向け、次のように言わせるのである。

さて、今宵の祿をば、いかがすべき。涼・仲忠は、さてあり、おもと（仲忠母）には、みづからをやは得給はぬ。

（内侍のかみ・四三〇頁）

昔よりかやうならましかば、今は、国母と聞こえてましかし。わいても、仲忠の朝臣ばかりの親王なからましかし。よし、行く末までも、私の后に思はむかし。

（内侍のかみ・四三六頁）

しかし、仲忠母は重臣藤原兼雅の妻である。臣下の人妻と帝との恋愛はそのままではやや不自然さを持つものである。ここで、帝と仲忠母の恋愛を、読み手に違和感なく受け入れさせるための仕掛けが、内侍のかみ巻の随所で見られる臣下とキサキたちの恋なのである。内侍のかみ巻では、源正頼と承香殿御息所、兼雅と仁寿殿女御、兵部卿宮と承香殿女御、仲忠とあて宮の恋が語られ、他ならぬ帝に

よって称賛すべきこととされている。三上満氏はこのことについて、「妃と貴公子との恋の動機のくり返しは、帝と貴婦人の恋を自然なものとする背景」を成すと述べている。<sup>36)</sup>

そしてさらに、臣下とキサキの恋を發展させるために作者が設定したのが、「賄ひの女御」であった。

その日、朝<sup>あした</sup>の御賄ひには仁寿殿の女御、昼の賄ひには承香殿の女御、夜さりの御賄ひには式部卿の女御、更衣十人、色許され給へる限り、色を尽くして奉れり。

(内侍のかみ・三九五〜三九六頁)

ここで、兼雅が恋する仁寿殿女御、兵部卿宮が恋する承香殿女御が、節会の食事の給仕をすることは、臣下とキサキの距離を近づけることに一役買っているのである。松野彩氏は、節会で女御が陪膳役にあたることは史実にはないとし、「ここで注目されるのは節会の「賄ひ」を女御がつとめることによって、帝以外の男性たちに声が届く、あるいは垣間見が可能な距離に女御が伺候することになり、女御との恋の契機を作り出し、女御に対する男性たちの気持をより高まらせていることである。(中略)「賄ひの女御」という不自然な設定は、朱雀帝をして叶わぬ恋とわかっているながらも心を尽くさずにはいられない恋への憧憬をいっそう募らせるとともに、女御への恋に狂おしく心を惑わせる男

性たちの姿を浮かび上がらせているのである」と論じていて、史実とは異なる「賄ひの女御」の設定意図を明らかにしている。<sup>37)</sup>ちなみに、史実のみならず物語内の出来事と比較してみても、この「賄ひの女御」の設定は不自然である。新帝即位後の内宴でもキサキが賄いをつとめる例があり、そこには次のようにある。

内宴には、平中納言殿の御息所なり。かたちも、清げなり。ある中に下臈にて、賄ひ給ふ。(国譲下・八〇一頁)

平中納言女は恐らく更衣であると考えられるから、賄いをしてもおかしくはない。<sup>38)</sup>新帝のキサキたちの中で、身分が低い「下臈」の平中納言女が賄いをし、高い地位にいると思われるあて宮、仲忠妹らはその役を担わない。史実だけでなくこのことと比べてみても、系譜不明の承香殿女御、故式部卿宮女でしっかりした後見もないであろう式部卿女御<sup>39)</sup>はともかくとして、改めて、朱雀帝の寵愛深く勢力ある左大将正頼の娘、仁寿殿女御が賄いをするという設定の異常さが際立ってくる。

ここで注目すべきなのは、後宮をあげての盛儀であった相撲の節会において、筆頭のキサキであるはずの朱雀帝后宮の影が薄いことである。后宮は「賄ひの女御」を務めるわけでもなく(最高位の後という身分柄、それは当然とも言える

が、その出番は、節会終了時に、「『かかる妻持たりたる人（兼雅）、いかに異人を見む』と、後の宮より始め奉り、そこばくの人思ほす」（四三五頁）と琴を演奏した兼雅夫人、仲忠母を讃え、退出した仲忠母に、「後の宮より、同じき志津川仲経が仕うまつれる蒔絵の御衣箱みせいばこ五具に、御装束、夏のは夏、秋のは秋、冬のは冬の御装ひ、さまざまに、言ふ限りなく清らなり」（四四〇頁）と贈物をするのみである。仁寿殿女御が節会で賄ひの女御として姿を見せ、「さらに、本性の御かたち、この御息所に似たるなし」（三九六頁）と賞賛され、宴に華を添えるのとは全く対照的なのである。

思い起こしてみれば、仁寿殿女御の側に朱雀帝の寵愛が深いことを、物語は繰り返し語っていた。嵯峨の院巻では、朱雀帝の心中は、「御息所（仁寿殿女御）、ただ今の時の盛りにておはしませば、その御ゆかり・よすがをば、「わが御位をも譲りてむ」と思せど……」（二九〇頁）と記され、帝は仁寿殿女御を愛する余り、その親類縁者には帝の位さえも譲つてもいいと思つてゐるという。内侍のかみ巻では、「かくて、その日、賄ひの御息所たち、一の女御大將殿の仁寿殿、式部卿の女御なり。これ、ただ今、時の女御なり」（三九六頁）と、仁寿殿女御は朱雀後宮の「一の女御」で時めいてゐるとされる。蔵開上巻では、「仁寿殿の女御の、思ふやう

にめでたき人なり。宮仕へは、同じき帝と聞こゆれど、上に限りなく時めかされ奉りたり」（五二六頁）と、女御・更衣たちに帝の御覚えめでたいことを羨望されているのである。対する后宮は、『宇津保物語』前半では、登場回数も少なくその容姿や性格について描写されることもない。物語の前史では、自らの立后と息子の立坊を果たし、仁寿殿女御方に対して圧倒的な優位を誇つた后宮だが、物語中、特に内侍のかみ巻では、仁寿殿女御の素晴らしさとその実家である源正頼一族の勢威ばかりが、強調して描かれる。東宮母にして皇后という並びなき地位にいるはずの後宮よりも、仁寿殿女御が際立つた存在なのである。

これらのことから思うに、決して低い身分のキサキではない仁寿殿女御が「賄ひの女御」として臣下の前に姿を現す場面を描いたのは、（キサキと臣下のロマンスを發展させるという意図もあろうが）後宮における真の華で臣下たちの憧憬の対象になるのは、后宮ではなく仁寿殿女御だということ。を、作者が明らかにしようとしたためではないだろうか。仁寿殿女御の描写の機会を多くし、実質的には後宮において后宮以上の存在であるその姿を、読者の脳裏に深く刻みつけようとしたのである。内侍のかみ巻以降、やがて物語は次期東宮をめぐる立坊争いへと發展する。作者が物語前

半で后宮よりも仁寿殿女御に華を持たせるような描き方をしたのは、後の物語展開で、仁寿殿女御の実家の源氏が后宮率いる藤原氏に勝利し、あて宮腹皇子の立場により源氏が栄華を極めることを予告するものとも考えられる。内侍のかみ巻末で、数多くのキサキたちの中で后宮と共に仲忠母に贈物をしたのが仁寿殿女御だけであり、「また、女御たちそこの御中に、仁寿殿のみなむし給ひける。さる切なる物、はた、え、異君達は取う出給はず。今宵の尚侍の御贈り物は、世の中にかしこき人、え取う出給はねど、仁寿殿は、さる大將殿（正頼）のいつき娘といふ所なむ、さ言へど、取う出給ひける」（四四〇〜四四一頁）と豪華な品々を用意しているのは、仁寿殿女御・源正頼一族の勢力が、后宮側にとつて無視できないほど大きくなっていることを、象徴しているのである。

## 五、結び

『宇津保物語』は、仁寿殿を朱雀帝の女御、源正頼大君の居所としている。天皇以外用いることが許されなかったであろう殿舎を一女御の居所としている、という点では、確かにこれは虚構の設定であろう。しかしまた、別の見方をすれば、仁寿殿が華麗な宮廷行事の場として用いられてい

たという史実を、物語は忠実に反映している。このことを考えてみるに、作者は仁寿殿に關してそれなりの知識があったように思える。格が高く宮廷の諸行事に用いられて華やかな様相を帯びた仁寿殿を、物語中の重要人物、源正頼大君の居所とすることによって、帝の愛情を一身に受ける寵妃正頼大君とその背後にある実家の正頼一族の権勢を示すという意図があったのだろうと推測されるのである。東宮の母たる后宮をさしおいて、朱雀朝後宮の中心人物は正頼大君であり、彼女の居所仁寿殿は、帝や臣下が交流を成す場として描かれる。次々に宮廷行事が仁寿殿で催されるたびに、その主である正頼大君の存在感が増してくるのである。殊に、内侍のかみ巻において仁寿殿で行われた盛儀である相撲節会は、正頼大君を前面に押し出し、彼女を強く読者に印象付けるものであった。ここで、節会の舞台が仁寿殿に設定されたことだけでなく、その主たる仁寿殿女御を「賄ひの女御」として要所に登場させ、その人物描写をしたことは、后宮ではなく彼女こそが、帝の寵愛に見合った美貌を持つ後宮第一の女性である、と読者に認識させる。そしてそのことは、仁寿殿女御方（源氏）が后宮方（藤原氏）に立場争いで勝利するという展開への布石ともなっているのである。

『宇津保物語』は、安和の変のような史実を巧みに物語中に取り入れていることが評価されているけれども、しかし一方では、本稿で取り上げたような細かい設定の部分で史実と食い違い、『源氏物語』ほどの一貫性や写実性がないととらえられがちである。ただし、その史実と矛盾する部分には、作者の無知やいい加減さから来るものであったのかどうか、それについてはさらに検討を要するところであろう。本稿では、キサキが仁寿殿を局とするという史実に反する設定は、仁寿殿女御方の朱雀後宮における勢力を示すために、意図的に為されたものであり、源正頼一族が政治の主導権を握っていることを読者に知らせるものである、ということを指摘した。

※本稿の中で引用した『宇津保物語』の本文は原則として室城秀之氏校注『うつほ物語 全 改訂版』（二〇〇一年、おうふう）による。（おうふう）と略す。底本は尊経閣蔵前田家十三行本。引用文には私に傍線や注記を施した。

※その他、参照した注釈書のうち略称によって示したものは以下の通りである。

・日本古典文学大系『宇津保物語一〜三』（河野多麻、一九五九〜一九六二年、岩波書店）〈大系〉

・角川文庫『宇津保物語上〜下』（原田芳起、一九六九〜一九七〇年、角川書店）〈角川文庫〉

・校注古典叢書『うつほ物語①〜⑤』（野口元大、一九六九〜一九九九年、明治書院）〈校注古典叢書〉

・新編日本古典文学全集『うつほ物語①〜③』（中野幸一、一九九〇〜二〇〇二年、小学館）〈新全集〉

※調査には、東京大学史料編纂所データベース、国史大系『六国史』（吉川弘文館）、改訂増補故実叢書『天内裏図考証』（明治図書）、新編日本古典文学全集『栄花物語』（小学館）、『内裏および公卿邸宅火災年表』（『平安貴族の世界』（村井康彦、一九六八年、徳間書店）所収）、『平安宮内裏の研究』（鈴木亘、一九九〇年、中央公論美術出版）、『平安時代補任及び女人綜覧』（本田伊平編、一九九二年、笠間書院）、『新編国歌大観』（角川書店）等を参考にした。

#### 【注】

（１）本稿では天皇・東宮の皇妃たちのことを、令制における「妃」と区別するために、「キサキ」と片仮名表記することにする。

（２）宮田和朗氏「宇津保物語」（『岩波講座日本文学』第七巻、

一九三二年、岩波書店)、片桐洋一「昔物語の方法―宇津保物語国譲の巻を中心に―」(『国語国文』一九六二年八月)、山中和也氏「殿舎名を冠した皇妃の呼称のかたち―宇津保の国譲下巻から源氏の承香殿女御へ―」(『古代文化』一九九〇年九月)、鷲山茂雄氏「源氏物語の始まり―「桐壺」巻の幻想喚起装置―」(『源氏物語と平安文学』第五集、一九九三年、早稲田大学出版)。

- (3) 角田文衛氏「平安内裏における常御殿と上の御局」(『平安博物館研究紀要』一九七二年二月)、瀧浪貞子氏「宮城図 解説」(一九九六年、思文閣)。

- (4) 目崎徳衛氏「仁寿殿と清涼殿」(『貴族社会と古典文化』、一九九五年、吉川弘文館)。

- (5) 『日本紀略』天長元年十月二十六日条。

- (6) 角田・瀧浪氏注3論文は、「中殿」の名は承香殿と紫宸殿の間にあったことによるとする。しかし、承香殿に関しては、『大内裏図考証』に「東寺所伝、大内図曰、承香殿、弘仁已後所建」とあり、鈴木亘氏は、仁寿殿の移築が考えられる貞観年間当初頭に承香殿が造営された可能性があるとしている(『平安時代初期における平安宮内裏の修造』(『平安宮内裏の研究』、一九九〇年、中央公論美術出版)。もしそうならば、「中殿」の名は、まだ造営されていない承香殿ではなく常寧殿と紫宸

殿の間にあることによるのではないか。

- (7) 瀧浪氏注3論文。

- (8) 『続日本後紀』承和九年二月十六日、同十一年閏七月七日条。

- (9) 目崎氏「文徳・清和両天皇の御在所をめぐって―律令政治衰退過程の分析―」(注4書所収)。

- (10) 鈴木氏注6論文。瀧浪氏注3論文もこれに従う。

- (11) 『三代実録』貞観十七年二月十四日、四月一五日、同十八年十一月二十七日条。

- (12) 『三代実録』元慶元年二月二十九日条。

- (13) 『三代実録』元慶二年六月二十九日、同三年四月二十二日、同四年十二月五日、同五年二月九日、同六年十一月十七日条。

- (14) 目崎氏注4論文。

- (15) 『三代実録』元慶三年四月八日、七月二十七日、同四年正月二十一日、七月二十八日・二十九日、同七年十月七日条。

- (16) 『三代実録』仁和元年十二月十八日、同二年正月二十日条。

- (17) 『三代実録』仁和三年八月二十六日条。

- (18) ただし宇多天皇は即位後東宮雅院におり、内裏の清涼殿に入るまで三年以上もそこを居所とした(『日本紀略』仁和三年八月二十七日、同十一月十七日、寛平三年二月十九日条)。

- (19) 角田・瀧浪氏注3論文。

- (20) 鈴木氏「平安宮常寧殿の復元」(注6書所収)。

(21) 滝川幸司氏は、平安初期の天皇の居所だった仁寿殿で内宴が行われたことに關して、天皇のプライベートな空間で行われるのが内宴であり、そこに天皇の「私」の宴としての性質が見て取れるとされる〔内宴〕〔天皇と文壇〕、二〇〇七年、和泉書院〕。氏に従えば、仁寿殿で行われた宮廷行事は私的なものであったということができよう。また瀧浪貞子氏も、「紫宸殿のハレに対してケの行事の場として用いられている」と述べている（注3論文）。

(22) 目崎氏注4論文。氏は、「うつほ物語」の作者は「嵯峨院」を登場人物の名称に用いた点からしても嵯峨朝に關心を寄せていたと思われるから、あるいはこうした事実を承知していたのかも知れない」とされる。

(23) 「太皇太后穩子」〔紫式部とその時代〕、一九六六年、角川書店〕。

(24) 〈角川文庫〉は「試策」か。「詩作」説は語構造如何。」とし、〈おふうふう〉もこれに従う。しかし、史上では、七月七日に試策を行う例は見られないことから、〈大系〉〈新全集〉のように七夕の日の賦詩宴のことと解し、「詩作」と改める。

(25) この箇所、次の文との続きが悪いが、諸注が「東宮も」で文を終止させ「せさせたまふ」などの省略と解するのに従う。

(26) 「内宴思ひ違へたるなるべし」の一文を、〈校注古典叢書〉〈おふうふう〉〈新全集〉は、後人の注記の混入かとする。相撲の節は、

通常紫宸殿前庭で行われたのだけでも、時には仁寿殿で行われることがあった。この注記は誤りであろう。

(27) 「宇津保物語」において、帝の常御殿が清涼殿であることは、朱雀帝が仲忠母に向かつて、「時々、なほ参り給へ。御息所は、願ひに従ひて、清涼殿をも譲り聞こえむ。みづからは屋陰に住むとも、御願ひの所はものせむ」（内侍のかみ卷、四三六頁）と言っていることや、沖つ白波巻で仲忠が帝に召されて清涼殿で琴を弾くこと、「寝殿は、清涼殿の様やうを造れれど、例の調度なれば、例の所のやうなり。」（国譲上・六五四頁）と源

正頼の邸宅の様子が記されていることから、推測できる。湯浅幸代氏「皇后・中宮・女御・更衣―物語文学を中心に―」（日向一雅編『王朝文学と官職・位階』、二〇〇八年、竹林舎）は、「一の女御」と記される「仁寿殿の女御」が、天皇の在所、及び儀式空間に居住を許された特別な存在であることを示している。」と述べている。

(29) 正頼女が「仁寿殿」とされる用例は、初めて呼ばれる嵯峨の院巻からあて宮巻まで三例。対して内侍のかみ巻以降は、最終巻の楼の上下巻まで二十七例と、圧倒的に増加する。

(30) 三上氏「宇津保物語・初秋巻の方法」〔中古文学論叢一九八四年十月〕、高橋氏「長編物語の構成力 宇津保物語「初秋」の位相」〔日本文学講座4物語・小説―I〕（一九八七年、

大修館書店」所収。

(31) 前田家本「給ふ」を諸注「けふ」と改めるのに従う。

(32) 前田家本「ふることなむ」。(校注古典叢書)は「ふることにとなむ」、その他諸注は「ふることにせむとなむ」とする。

(33) 前田家本「婦女」。(校注古典叢書)〈おうふう〉は「夫人」の誤りととるが、その他諸注は「女御」とする本文をとっている。夫人は古い時代のキサキの身分でありこの物語には登場しないため、「女御」としておくが、なお考慮の余地がある。

(34) 前田家本「きくくあり」。(おうふう)〈新全集〉などが「さてあり」の誤りとするのに従う。

(35) ただし、多田一臣氏「男ならば、大臣の子とせよ」(『額田王論―万葉論集―』、二〇〇一年、若草書房)は、臣下がその妻を天皇と共有することはよくあることで、決して不自然ではないとされ、『宇津保物語』の仲忠母についても取り上げている。

(36) 三上氏注30論文。

(37) 『うつほ物語』「内侍のかみ」巻についての考察―繰り広げられる恋愛模様を中心に―(『国語と国文学』二〇〇五年一月)。

(38) 『西宮記』巻二「内宴」所引の『宇多天皇御記』仁和四年正月二十一日条によると、光孝朝においては、内宴の賄いを更

衣が動仕していたという。

(39) 国譲下で、この女御は「中の君の姉女御」と語られていることから、兼雅の妻妾の一人で早くに父親を失った式部卿宮中の君の姉ということが分かる。

(40) ただし、筆頭のキサキは、立后していて東宮の母である后宮であつただろう。仁寿殿女御は、あくまでも女御の中で第一位だったのである。

(41) 後に国譲卷になると、后宮は藤原氏を率いて梨壺腹皇子を立坊させようと画策し、大きな存在感を示す。片桐氏注2論文は、「(后宮は)あて宮の巻あたりから物語に姿を見せ始めるが、はつきりした印象を読者に示すのは、この事件(引用者注:国譲卷の立坊争い)に関連してからである。つまり、作者はこの坊争いのために后の宮を造型したと言っても過言ではない。国譲の巻、特に下巻での彼女の活躍はそれほどにすさまじいのである。」とされる。なお、物語後半の后宮については、拙稿『宇津保物語』后宮考―常寧殿を居所とする母后―(『国語と国文学』二〇〇八年八月)を参照されたい。

(42) 仁寿殿女御は内侍のかみ巻前半でも、色好み兼雅に、「今の世の女の深くありがたき御心は、仁寿殿の女御こそおはしますらめ」(三八九頁)と賞賛されている。

(43) 承香殿女御・式部卿女御も同様に賄いをするが、この二人は『宇

津保物語』で登場回数も少なく、脇役的扱いである。物語の主要登場人物で、賄いをするキサキたちの中で最も賞賛されている仁寿殿女御は別格であろう。父源正頼の権勢と帝の寵

愛を背景に、彼女こそが「賄ひの女御」の中で最も華やいだ存在であり、后宮に唯一匹敵しうる立場の人物であった。